

石灰岩の丘に暮らした狩猟採集民

—トルコ、チャクマックテペ遺跡第3次調査(2023年)—

三宅 裕 筑波大学人文社会系教授
板橋 悠 筑波大学人文社会系准教授
シャーヒン・ファトマ チュクロヴァ大学文理学部准教授

Hunter-gatherers Living on the Top of the Limestone Hills: The 2023 Seasons of the Excavations at Çakmaktepe, Turkey

MIYAKE, Yutaka Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba
ITAHASHI, Yu Associate Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba
SAHIN, Fatma Associate Professor, Faculty of Humanities and Natural Sciences, Çukurova University

1. はじめに

チャクマックテペ遺跡はトルコ南東部、シャンルウルファ市の西方約 20 km に位置する、新石器時代の初頭に居住が営まれた集落遺跡である。シャンルウルファ市の南東方に広がるハラン平原は、南側を除いて周囲を石灰岩の丘陵地帯によって囲まれ、その丘陵地帯にはギョベクリ・テペ遺跡やカラハンテペ遺跡をはじめとして、新石器時代の遺跡が数多く確認されている。2021 年にはシャンルウルファ周辺地域における新石器時代の様相を解明することを目的とした「タシュテペレール(石の丘)プロジェクト」が組織され、新石器時代の遺跡を対象に集中的に発掘調査が進められている。チャクマックテペ遺跡の発掘調査もこのプロジェクトの一翼を担うものであり、チュクロヴァ大学(アダナ)との共同調査の形で、2023 年には第3次の発掘調査が実施された(図1)。

2. 遺跡の概要

チャクマックテペ遺跡の年代については、放射性炭素年代がまだ得られていないという問題はあるものの、打製石器や遺構の様相に基づいて、新石器時代の初頭に相当する先土器新石器時代 A 期(PPNA 期)に営まれた遺跡とみることができる。打製石器は単設打面石核から剥離された石刃・剥片を基本としており、両設打面石核であるナヴィフォーム石核やそれから剥離された石刃などは確認されていない。尖頭器もエル・ヒアム型とヘルワン型にほぼ限定され、ビブロス型尖頭器などは出土していない。また、利用されている石材

も石質や色調が多様であり、チョコレート色をした良質のフリントが大多数を占めるようになるカラハンテペ遺跡やサイブルチュ遺跡のものとは異なっている(有村誠氏、Ferran Borrell 氏私信)。さらに、黒曜石製の石器はこれまでにわずか1点しか出土しておらず、きわめて少ないことも特徴的である。

これまでの調査では、遺跡の頂上部から一部石灰岩の岩盤を掘削する形で構築された、長軸の長さが 16 m にも達する楕円形に近い大型の建物(10号遺構)が検出され(三宅ほか 2023)、シャンルウルファ周辺地域においても公共建造物的性格をもった建物が PPNA 期にまで遡ることが明らかになった。この建物からはギョベクリ・テペ遺跡やカラハンテペ遺跡で確認されているような T 字形をした石柱は検出されていないものの、ていねいに加工された「I 字形」と呼べる石柱の破片が多数出土している。浮彫りによる装飾も施されておらず、きわめてシンプルなものであるが、様式化が進み装飾が付加されるようになる T 字形石柱の祖型と考えることができ、それはこの遺跡の年代観とも整合的であると言える。また、別の調査区からは直径が 4~5 m 前後の円形で半地下式の建物がまとも検出され、これらは一般の住居跡であったと考えることができる。このようにチャクマックテペ遺跡は、近年その類例が数多く蓄積されつつある、1 基程度の公共建造物と多数の住居跡から構成される、先土器新石器時代に典型的な集落構造をもつ遺跡であると評価することができる。



図1 チャクマックテペ遺跡発掘区全景



図2 10号建物北側I字形石柱出土状況

3. 公共建造物周辺の調査

公共建造物的性格をもっていたと思われる10号建物に関する状況を明らかにする目的で、この遺構の周辺部において、特にその北側と南側を中心に調査をおこなった。いずれもこの建物を区画するような形で検出された、壁の基礎とみられる溝状の掘り込みの外側に相当する。10号建物北側の調査区では、地表面に露出する形ですでにI字形石柱の破片を含む大型の石が確認されていたが、発掘によってさらに石柱の破片が多数まとまって検出された。この区域は地形(岩盤)が全体に北東に向けて傾斜しており、大型の石は概ねその傾斜に沿うような形で、高所から斜面の下部へと散布している状況が認められた。10号建物の北側に隣接する部分では、斜面の途中に大型の石をL字状に並べて一定の区画を設けている箇所があり、その山

側に相当する部分からはI字形石柱の破片13点を含む大型の石がまとまって出土した(図2)。斜面下方にももう1箇所、I字形石柱の破片がある程度まとまって検出された場所があり、そこからは9点の破片が確認された。

石柱は全体として板石状を呈するが、長軸側の小口面の一方は平坦に仕上げられ、もう一方は角が丸みを帯びる形となっている。石柱の上端部に相当すると思われる破片も検出されており、平坦な小口面側から角が丸みを帯びる小口面側に向けて直線的に傾斜していることが確認できる。こうした特徴に基づくと、I字形石柱の正面は平坦な小口面の側であったと考えることができ、小口面が正面となることはギョベクリ・テペ遺跡などで知られるT字形石柱と共通する。石柱の上端部に相当すると思われる破片は、発掘の際に確認されたものだけでも5点あり、すべてが同じ建



図3 10号建物南側I字形石柱出土状況

物にともなうものであったかどうかは別にしても、I字形石柱が複数基存在していたことは間違いなく言うことができる。2022年の調査では10号建物の南東方からも上端部の破片が2点確認されており、I字形石柱は遺跡全体で少なくとも7基はあったことになる。

10号建物北側の石柱の破片がまとまって検出された区域からは、大理石に近い良質の石灰岩を素材とした石製容器の破片も出土している。全体は厚みのある円盤状を呈しており、特に上面がていねいに磨かれて平滑に仕上げられていることが特徴である。上面の縁辺部には断面が三角形の低い突帯がめぐっており、物を納めるための容器というよりは、供献用であった可能性が考えられる。外面上部はある程度の部分まで磨かれているものの、それ以下の部分には製作時の敲打痕が明瞭に残っている。これとよく似た石製容器は、ギョベクリ・テペ遺跡やカラハンテペ遺跡から完形品が出土しており、中には上面中央部に円形の浅い窪みが見られる事例も確認されている。チャクマックテペ遺跡のものは原位置から出土しているわけではないが、10号建物の付近からI字形の石柱とともに出土していることを考えると、特別な建物において催された祭儀と関係している可能性が高いように思われる。また、こうした特徴的な皿形の容器はユーフラテス川中流域のテル・ムレイベト遺跡やティグリス川上流域のキョルティック・テペ遺跡からも出土しており、その分布がシャンルウルファ周辺地域に限定されるわけではないこともわかっている。

10号建物の南側に相当する発掘区では、地表面に岩盤が露出している部分が見られるなど、全体に堆積

が薄いことが確認された。ここでは、岩盤に穿たれたカップ・マークがまとまってみられる場所が何箇所か確認されたほか、I字形石柱の破片を再利用する形で大きく弧状に並べている遺構も確認され(図3)、10号建物の廃絶時かその直後に、そこで何らかの活動がおこなわれたことを示している。ちなみに、いまのところ遺跡の頂上部からは住居跡などは確認されておらず、特別な空間として意識されていたと推測される。

4. G-8 区の調査

これまでの調査において、G-7区からは直径が4～5mほどの半地下式の円形建物がまとまって検出され、集落の中の居住域に相当すると考えられた。そこで、居住域の広がりやその様相を明らかにする目的で、2023年にはその南側に位置するG-8区において新たに調査を開始することにした。発掘区の北東部ではG-7区で検出されていた遺構の延長部分が確認されたものの、当初の予想に反して発掘区の約70%に相当する範囲に大量の石が密度高く分布している状況が明らかになった(図4)。これらの石は直下の地形(岩盤)に沿うような形で全体的に西側に向けて下がっていく様子が認められたが、岩盤の上面自体も平坦ではなく、それが落ち込んでいる部分には石が厚く堆積しているように見受けられた。

大量に投棄された石の中には、板状の比較的軟質な石灰岩を粗く打ち欠いて、全体の形状を楕円形あるいは隅丸方形に整えているものが多数含まれていた。典型的なものは底面が平坦で上面が凸状を呈する平凸形(プラノコンベックス形)であるが、上下両面とも凸



図4 G-8区全景



図5 G-8区 リング形の石出土状況

状を呈するものも少なからず認められた。その長さは30~60 cmと幅があり、大きさに顕著な規格性は認められないと言することができる。これによく類似した石は、シリアのユーフラテス川中流域に位置するテル・ムレイバト遺跡ではじめて認識され、「葉巻形の石(cigar shape stones)」あるいは「パン形のレンガ(bricks of loaves)」などと呼称されている(Van Loon 1968)。その後も、ジェルフ・エル・アフマル、シェイク・ハサン、テル・アバル3など、ユーフラテス川中流域のPPNA期からPPNA-PPNB移行期にかけての遺跡からも出土が確認され、建物の壁を構成する建築部材として用いられていたことも明らかになっている(Stordeur 2015)。また、こうした建築部材の加工に用いられた可能性が指摘されている、フリント製の丸鑿状の石斧・手斧(仏語では *herminette*)もチャクマクテベ遺跡から出土しており、石の形状や加工法だけでなく加工具まで類似していることは、シャンル



図6 G-8区 円盤状の石出土状況

ウルファ周辺地域とユーフラテス中流域との間に文化的に密接なつながりがあったことを示していると言える。

大量に発見された石の中には、全体でリング状を呈すると思われる特徴的な形をした石の破片も認められた(図5)。リングの内側の面に突起あるいは段が巡ることが特徴で、その形状にはいくつかの異なるタイプが認められることから、こうしたリング形の石は複数存在していたと考えられる。段状の部分にうまく嵌るように見える大型の円盤状の石も出土しており、もし両者がセット関係にあったのならば、円盤状の石には蓋としての機能を想定することができるようになる(図6)。これとよく似たリング形の石は、完形のものがギョバックリ・テベ遺跡から出土している。

大量に出土した石の様相をみると、その多くは建物の壁などを構成していた建築部材であったと考えられ、建物の廃絶に際して上部構造を取り払い、この場所に廃棄したものと思われる。石柱の破片こそ確認されて

いないものの、リング形の石や円盤状の石が含まれているところを見ると、一般の住居に由来するものとは考えにくく、10号建物のような大型の公共建造物を構成していた建築部材であった可能性が高いと思われる。建築部材がどの建物に由来するものなのか特定するのは難しいものの、10号建物の壁が廃絶時にすべて取り払われてしまっていることは、単なる偶然の一致ではないように思われる。

G-8区では大量の石との関係を把握できる状況で検出された遺構も存在する。発掘区西部で検出された17号建物は、遺構内にまで石が流れ込んでいる状況が確認され、大量の石が廃棄された段階でまだ埋まりきっていなかったことが判明している。したがって、この遺構が構築されたのは、石が廃棄されるよりも前であったことになる。その一方で、発掘区南東部で検

出された18号建物は一部石が分布する範囲を壊して構築されており、大量の石の廃棄後にも遺構の構築がある程度継続していたことを示している。

■参考文献

- ・ Karul, N. 2021 Buried Buildings at Pre-Pottery Neolithic Karahantepe. *Türk Arkeoloji ve Etnografya Dergisi* 82: 21-31.
- ・ Stordeur, D. 2015 *Le village de Jerf el Ahmar (Syrie, 9500-8700 av.J.-C.). L'architecture, miroir d'une société néolithique complexe*. Paris: CNRS.
- ・ Van Loon M. 1968 The Oriental Institute Excavations at Mureybit, Syria: Preliminary report on the 1965 campaign. *Journal of the Near Eastern Studies* 27: 265-290.
- ・ 三宅裕、板橋悠、シャーヒン・ファトマ 2023「石灰岩の丘に暮らした狩猟採集民—トルコ、チャクマックテベ遺跡第2次調査(2022年)—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』14-17頁 日本西アジア考古学会。